

『カール・バルト—破局のなかの希望』

福嶋揚著 ぶねうま舎 2015年

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

20世紀最大のプロテスタント神学者と評されるカール・バルト (1886～1968) は、その後半生において大著『教会教義学』に取り組んだ。35年間にわたり書きつづられたこの書物は、遺稿部分も含めると1万頁にも及ぶ。新教出版社から全巻36冊の日本語訳も出ている。その内訳は第1巻「神の言葉」6冊、第2巻「神論」6冊、第3巻「創造論」11冊、第4巻「和解論」13冊である。この後、さらに第5巻「終末論」(救贖論とも言われる)と続くはずであったが、バルトの死によりこの神学史上最大の著作も未完に終わった。

神学とは神についての語りであり、神学の一分野として教義学がある。教義学は「教会の権能」なるがゆえに、バルトにあっては「教会教義学」と称せられる。この教会は、そこから現実の教会をたえず相対化し批判しうる「終末論的地平」としての教会、すなわち唯一のエキュメニカルな教会を指す。それゆえ、教会教義学は教会の宣教内容の反復叙述に止まることなく、教会の宣教の批判と修正にたえず取り組まなければならない。バルト神学とはまさにキリスト教の徹底的自己検証の運動そのものであり、「キリスト論的集中」による迫力ある探究には、多くの人々を惹きつけてやまない魅力がある。

『カール・バルト—破局のなかの希望』は、著者の福嶋揚氏がこの『教会教義学』を研究対象とし、とくにその死生観に焦点を定め、バルトの問題意識によせて現代社会の危機にも言及しつつ論じた労作である。本書は2009年に福嶋氏が刊行した学位論文『死から生命へ—カール・バルトの死生観の研究』(原文ドイツ語)の続編に当たる。

本書は全3部11章構成で、この前と後に序章「死の陰の谷において—21世紀にバルトを読む」と終章「死から生へと向かう希望」が置かれている。全体としてキリスト教神学の研究書でもあり、第1部「永生と今生のあいだ」はとりわけ専門的議論が終始なされているので、一般の読者は、むしろ第2部「人間世界の自己破壊を超えて」や第3部「正義・和解・未来」の中の関心のある章から読み進めても差し支えない。

第1部「永生と今生のあいだ」は、第1章「時間と永遠」、第2章「聖霊・魂・肉体」、第3章「人間の死とキリストの死」という3つの章からなる。ここで論じられるのは人間存在の構造をなす時間性を軸に、人間の生と死、またその魂と肉体、さらには人間の死とイエスの十字架の死との関わりについて展開される神学的議論である。時間は永遠との関わりの中で問い質すべきものであり、バルトによれば永遠の内には独特な意味で神の「三位一体」的存在構造が関わっているという。とくに救済論の観点から焦点になるのが「霊」である。霊は生と死を区別すると同時に生と死を統一する根拠であり、それはまさに究極の生命でもある。

第2部「人間世界の自己破壊を超えて」は、第4章「生命への畏敬について—バルトとアルバート・シュヴァイツァー」、第5章「自殺について—バルトと滝沢克己」、第6章「戦争について」、第7章「人生の一回性について」という4つの章からなる。第2部は、各章のタイトルが示す通りに、比較思想論的な検討をしつつ、バルト神学における生と死の理解に照明を

当てていこうという試みである。

評者が最も問題関心をもって読んだのは第4章である。ここで取り上げられるのは、シュヴァイツァーの「生命への畏敬」の倫理へのバルトの「創造論」による神学的応答である。シュヴァイツァーは、哲学思想として生への畏敬の倫理はその核心のみ語り得るとし、生命の神秘や死の謎についてはあえて論及しなかった。バルトは一方、キリスト教神学の枠組みの下に委曲を尽くして論じる。そして生命という「地」と死という「囿」の差異を消去することなく、両者を包括する高次の生命の想定を行った。これが彼の「生命のための、死と生命の統一」という包括的な死生観である。

そのほか第2部で興味深いのは、バルトが病氣や自殺、また死刑制度や戦争というものについて、どう考えていたかが示されているところである。そうした人間の生の「自己破壊」的な側面の根底には、そもそも人生が一回きりであるという問題が存している。どんな人間においても生命は「過ぎ去り行くもの」であり、最後は死が勝利する。しかし、バルトは限界と自由を結びつけ、生命の逆説的意義の観点から、人生の一回性の意義を再発見する。究極において祝福された信仰に基づく一回性と見なす見方が、経験的視点による悪しき一回性の見方を凌駕するのである。

第3部「正義・和解・未来」は、第8章「倫理の源泉としての義認—バルトとハンス・キュンク」、第9章「生命の光」、第10章「希望に基づく闘争—『教会教義学』の未完の終末論」、第11章「バルトの唯一の終末論講義」という4つの章からなる。義認とは聖書に基づく正義の謂いであるが、バルトによる義認論は同時代の政治動向にも厳しく批判を向けていく。ここで想起されるのが、1934年にバルトが中心になって出された「バルメン宣言」であろう。これは、教会を国家主義の中に組み込もうとしたヒトラー政権の動きに対し、断固たる否をつきつけた有名な宣言である。福嶋氏は、この宣言の神学的意義を、『教会教義学』の「和解論」における「生命の光」論に至る一連の展開の中で分析し、高く評価している。また第3部では、遺稿や講義録を駆使したバルトの未完の終末論の探究もなされ、とても意義深いものがある。

神学は専門的な神学的議論を展開しながら、常に現実の問題に対峙して具体的でなければならない。バルトの大著『教会教義学』を死生観の観点を手掛かりに読み解く本書からは、現代の諸問題をも見越し、対峙していこうとする気鋭のバルト研究者のアクチュアルな学問的姿勢と意気込みが生き生きと伝わってくる。

